The Pacific Society

ナウル、オーシャンの日本海軍

中島 洋

第二次大戦では、日本海軍は昭和十七（一九四二）年八月二十五日、無抵抗裡にナウル島に陸戦隊を上陸させ、これを占領した。また翌二十六日には、ギルバート諸島のオーシャン（現地名バナバ）島に陸戦隊四十六名を上陸させ、同じく無血占領している。

もともと両島には敵の軍隊がいなかったから、無血占領は当然だが、日本軍の両島占領は、すでにガダルカナルの争奪戦が始まっていたために、連合軍のガダルカナル方面増援に対する日本軍航空機による哨戒、攻撃の基地とする意図に基づくものであった。

しかし、両島占領後の日本海軍はまことに奇妙なことをやった。[注1]

ナンシー・ヴィヴィアニ著の『ナウル』（ハワイ大学出版局一九七〇年）でこれを説明すると、次のようになる。

注1 Nancy Viviani

「一九四三年六月一日のナウル人口」

日本海軍陸戦隊	一、三八八
南洋拓殖従業員	七二
日本人労働者（コレア人を含む）	一、五〇〇
ヨーロッパ人	二
ナウル人	一、八四八
中国人	一八四
ナウル以外の太平洋諸島人	一九三
合計	五、一八七

さて六月下旬、さらに約千名の日本軍増援部隊が到着し、ナウルの人口は約六千人になった。

ここで補給に苦しむ日本軍は、デツダモ大酋長をはじめとする六百人のナウル人と七名の中国人を、トラック諸島の一島に送り出した。[注2] ところが翌月、日本海軍はオーシャン島から六五九人のギルバート諸島民を連れてきたばかりでなく、さらに八月には約一二〇〇人の陸戦隊が増派されて到着したために、カイザー牧師を含む六〇一人のナウル人を再びトラック諸島へ送り出したのである。[注3]

注2 日本ナウル協会石川二郎会長によれば、水旺島（現在のTOL島）の南洋拓殖の農場で預ったとのこと（太平洋学会誌第七号四四ページ）。

注3 同じく石川氏によれば、水旺島の横の芙蓉島（現TARIK島）の農場。

さて、右のように、一二〇一名（実に全ナウル人人口の約六五%）のナウル人をトラックへ送り出さねばならないのに、なぜオーシャン（バナバ）島から六五九人もの島民を連れてきたのであろうか。バナバ島ではどういう事態が起こっていたのであろうか。

バナバ（オーシャン）島での事情は、パシフィック・アイランズ・イヤーブックのキリバスの項で見てみよう。

これによると、日本軍占領時の人口は、バナバ島原住民約七〇〇人、ギルバート諸島の他の島々からリン鉱採掘労働者としてきていた者とその家族が約八〇〇人。全部で約一五〇〇人であった。

そして日本軍は、バナバ島原住民全員と何人かギルバート諸島人をコスラエ（旧クサイエ）島へ送り、約二百人のギルバート諸島人を漁民としてバナバ島に残し、残りのギルバート諸島人全員をナウルとタラワに送り出したというのである。

ところが昭和二十（一九四五）年八月、日本が連合国に降伏すると、オーシャン（バナバ）島の日本海軍は残していたギルバート諸島人全員を殺し、たった一人だけが逃げのびることができて戦犯裁判の証人となり、司令官と関係者が処刑されている。

ナウル独立の日は一月三十一日

一方、トラック諸島に送られていたナウル人は、飢えや病気や爆撃で終戦までに三分の一以上の人数が死亡し、終戦の翌年一月三十一日にナウルに戻ってきたのは、わずか七三七人であった（太平洋学会誌第七号四五ページ）。

ナウルは一九六八年に独立したが、独立の日を一月三十一日にしたのは、ナウルの人々が歴史的な再会の日を永遠に記念しようとしたものであり、これは同時に、日本軍と戦争に対する永遠の非難でもある。

バナバ問題の発端

さてナウルへ来ていたギルバート諸島人やコスラエに送られていたバナバ人はどうなったであろうか。コスラエへ送られていた人々は終戦の翌月、米軍によってタラワへ送られ、ナウルへ

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

きていた人々も同年十一月から十二月にかけて、ブリティッシュ・フォスフェイト・コミッション（BPC）のトリエンザ号でギルバート諸島へ送還された。

しかし問題はこれからで、BPCはバナバ（オーシャン）島が島民が生活できるように復旧されていないという理由で、バナバ島民全員およびバナバ島民と結婚しているギルバート諸島人、合わせて一〇〇三人を、フィジー諸島のランビ島へ送ってしまったのである。

ランビ島は水も豊富で土地も肥えており、最初のうちは、バナバ人たちも喜んでいたが、BPCがいつまでも自分たちを島へ帰さないばかりか、バナバ島で採掘するリン鉱石のロイヤルティーを、自分たちだけにでなく、ギルバート・エリス植民地政庁へも払っていること、さらにナウルの人たちより自分たちへのロイヤルティーが少ないことなどから、やがて国連でアッピールするほか、英国政府に対して訴訟を起こすようになる。

また、ギルバート諸島がキリバス共和国として独立する際には、バナバ島の分離独立を求める運動を行った。しかし、この分離独立は成功せず、バナバ人はキリバス共和国憲法で、議会へ代表を送ることと、バナバ島の土地所有権が保障されてはいるものの、フィジー国籍を持ち、依然としてフィジーのランビ島に住んでいる。

戦史から脱落したナウルとオーシャン

バナバ島民がフィジーのランビ島に住んでいるのは、終戦後のBPCおよび英国政府の責任ではあろうが、戦争中にコスラエへ送ってしまった日本軍の責任はどうなのだろうか。

また終戦に際して、二百人もの罪のないギルバート諸島人（女、子供もいたのであろう）を、一体、どんな理由で日本海軍は殺してしまったのであろうか。

防衛庁防衛研修所戦史室著の戦史叢書で、『中部太平洋方面海軍作戦〈2〉』（朝雲新聞社）を読んでも、何も書いてない。付表第六の一隅に、「ナウル島、及びオーシャン島は、海軍部隊のみ守備していた。これらの部隊の終戦に至る経緯は資料不足のため不詳である。今後の研究にまちたい」と単に記されているにすぎない。

玉砕した島でさえも、戦史はかなり詳細なのに、連合軍と地上戦を交えずに終戦を迎えた両島の「終戦に至る経緯」がなぜ資料不足なのであろうか。

『ソロモン収容所』

最近、ナウル島で終戦を迎えた元海軍第六十七警備隊の大槻巌氏が書いた『ソロモン収容所』（図書出版社、一九八五年十月）を読んで、なぜナウルの資料がないかがわかり、また、オーシャン（バナバ）島についても、おぼろげながらも様子がわかってきた。

両島の守備隊は、ソロモン諸島方面の部隊とともに、戦後は、ソロモン諸島のタロキナ（ブーゲンビル島）、ついでピエズ島の収容所でオーストラリア軍の管理下にあった。そしてピエズ島でのマラリアにより、三割とも四割ともいわれる被害を受け、しかも高級将校にまったく人を得ていなかった。

巻末に近い二六二ページから次のページにかけて、大槻氏は次のように書いている。

「当時の六十七警備隊の司令や羽柴連絡将校、高級将校たちは、つぎつぎと斃れてゆく隊員たちの悲惨な状況を認識していたのだろうか。〈略〉自分らさえ無事に帰れたなら、部下たちはどうなってもいいと思っていたのではないかと疑われても仕方がないと思う。その証拠に、司令や高級将校たちは桜田大尉を除いて一度も隊員たちを見回っていない。〈略〉復員後、司令をはじめ各高級将校たちは第二復員局（海軍担当）に報告書さえ提出していない。提出してあれば、防衛庁戦史室か厚生省にも記録が残っているはずだ。」

また同書には、一九四五年十月十日ごろのブーゲンビル島タロキナ収容所でのこととして、「われわれ六十七警備隊とオーシャン守備隊員たちに集合が命ぜられた。〈略〉首実験開始、なんともいやな気分である。〈略〉この首実験で、オーシャン部隊の兵曹長以上の指揮官たちのほとんどが、戦犯として連行されてしまった。」（一六六ページ）とある。

さらに一八七ページには「前回の戦犯容疑者探しでは、オーシャン部隊の指揮官クラスが根こそぎ連行された」、「ナウル、オーシャン両部隊で戦犯として処刑された将兵の数は定かでない」との記述が見られる。

終戦時におけるバナバ（オーシャン）島事件は、太平洋諸島で白人が日本人の悪口をいう時に、いまでも持ち出される話題だが、すでに四十年以上が経過しており、島の位置や島名さえ置き換えられて話されることがある。

そして日本側では、最も頼りにすべき『戦史叢書』にすら、何の記録も残っていない。

しかし、オーストラリアには戦犯裁判記録が保存されているであろうし、日本には元オーシャン部隊の将兵がまだ数十人は健在であろう。早い機会に、何が、なぜ起こったのか、きちんと調べておくべきだろう。

付記　トラックへ送られ、無事生還したナウル人の中に、その後、大統領となったデロバート氏がいた。

NII-Electronic Library Service